

小学校外国語教育が教科の本質に迫るには

英語科研究部

公立小学校に教科「外国語」が導入され4年目、広島大学附属小学校（以下、本校）に教科「外国語」が導入され10年目を迎える。世界的な規模で子どもに対する英語教育は拡大し、初等英語教育はそれ以降の英語教育に大きな影響を与えていると言われている。小学校外国語教育が始まった外国語活動導入期からも含めると、この10年間で日本全国で様々な実践やその効果検証がなされてきた。学習者用デジタル教科書の導入も開始され、様々な授業実践が展開されている。

小学校での外国語教育の目的は外国語運用能力の育成や異文化理解等、重要な点がいくつかあるが、本校では「外国語によるコミュニケーション能力の育成」に尽きると考える。筆者は、10年間にわたるカリキュラム研究と実践研究を踏まえ、「小学校外国語教育におけるコミュニケーションの本質とは何か」を考える時期にきていると考えている。

文部科学省（2017）では、コミュニケーション能力を「色々な価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら人間関係やチームワークを形成し、正解のない話題や経験したことのない問題について対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力」と定義している。コミュニケーションに必要な力は、「聞く」「読む」「話す」「書く」といった言語活動のほか、非言語による伝達手段（イメージ・身体・音）も含めた広範な活動にかかわるものであるとされており、気持ちや考えを表現して互いに伝え合うことは、他者とのかかわりの際に必要な能力である。自分の思いをわかしてもらおうとしたり、相手の思いをわかろうとしたりするためには、互いへの配慮や、粘り強く伝えようとしたり、相手の意図を汲み取ろうとしたりする意思がないと成り立たない。話し手は、自分の言いたいことを理解してもらうために、より伝わりやすい表現を探したり、より内容にあった表情やジェスチャーで補ったりするだろう。聞き手は、相手が伝えようとしていることを的確に理解するために、質問をして相手の思いを引き出したり、相槌を打つことで自分が理解しているかどうかを伝えたりするだろう。互いに支え合いながらのコミュニケーションを実感することは、「伝わった」「わかった」という達成感や充実感につながり、さらなるコミュニケーションへの足掛かりとなる。

それでは、小学校教育全体で求める「コミュニケーション能力」、さらに、小学校外国語教育で育む「英語によるコミュニケーション能力」とはいかなるものだろうか。また、それはどのような過程を踏めば、達成できるのであろうか。

本校英語科で育てたい子どもの姿について、以下の様相を想定している。

○教師や友達と協働して英語でコミュニケーションを行うことを継続することにより、自分自身の思考・判断をもとに表現したり相手の気持ちや考えに心を通わせて共感的な理解を得ようとしたりする姿。
○教師や友達と協働して英語でコミュニケーションを行い、使いながら言葉を身につけ、身につけながら言葉を使うことを繰り返し、徐々に安定した言語使用を目指す姿。

人はコミュニケーションによって情報のやり取りをする。その時は情報だけではなく、相手を尊重するという気持ちも一緒に運んでいる。コミュニケーションを通して、自分自身を深く知り、自分やなかまに対する肯定的な気持ちを育て、人間関係を構築する。他者と誠実に向かい合い、他者が言うことをしっかりと聞けるというのは、発言を単なる言葉・情報として受容し、承認するのだけでなく、さらに自分に惹きつけ、自分の考えや意見と関連させてこういうことかな、と考えようとするのである。

だれのどんな発言に対しても、自分から関わりを求めていく。なぜそういう意見になるのか、自分の思考の筋道や文脈ではどうにも理解できない時には、そのことを率直に伝え、相手に思考の筋道なり文脈を自分事として知りたがる学び手になってほしいと願っている。学校教育活動全体で様々な学習経験を積む中で、話を奥まで聞く力、意図を見抜く力、人と信頼関係を構築しながら全体で高めあう力、といった学びを深める力が育つ。それにはまず指導者が子どものどんな意見や考え、些細な感情に対しても、自分事としての深い関心をもつことが必要だ。そして、自分が抱いた心の奥底を素直に相手に伝え、さらにそれに対する答えを待つこと。子どもが本来もっている誠実さを磨き、豊かに育てるには、これらが不可欠である。

「小さなことでも自分で選択したり決定したりしているか」「チャレンジ精神でだれとでも尋ね合っているか」「相手に配慮する態度で対話をしているか」「相手の答えを尊重してその意味を理解・解釈しようとしているか」「何らかの反応で理解したことを伝えているか」という観点から子ども達の言語活動の姿を振り返り、より良いコミュニケーションを求めようとしてきた。もちろん学習経験が増えるにつれて会話のやりとりの回数が増え、内容も充実していく。しかし、そのベースにあるものはどの発達段階でも変わらない。

母語でも外国語でも「コミュニケーション」というとき、子どもにとって始まりは隣の友だちであり、一緒にいる指導者である。友だちを大事にして言語活動ができなければ、グローバル化に対応して「多様性を尊重し相手に配慮しながらコミュニケーションを図る」というところへは行き着かない。そして、そのようなコミュニケーションの素地を広く耕して豊かに育てていくことが小学校外国語教育の使命である。小中高大とこれから長く続く教科「外国語」を支えていくのは、中学年、また、場合によっては低学年の学習体験であることを念頭において、子どもと指導者がともに英語を用いてコミュニケーションを図ることが楽しいという小さな体験をたくさん積み上げていくことが重要である。

(文責 西原 美幸)